



ミーニュとの出会い

岡地 稔

もう 20 年ほど前のこと。本学に勤めはじめたころ、ミーニュのいわゆる『教父全集』（タイトルが非常に長いので、通例“Migne Patrologiae”とよばれる）の中のある一冊をもとめて、図書館地階の書庫をさがしまわった。当該書棚を見つけて、しばし茫然。膨大な量なのだ。頭上から足下まで、書棚全面が、というより印象では壁一面が、その『教父全集』でうまっていたのだ。圧倒された。

ジャン・ポール・ミーニュ。1800 年生まれのフランス人司祭。パリに出て、ジャーナリズムの世界にはいり、新聞などを発行するかたわら『キリスト教全書』2000 巻の刊行を企画したという。気宇壮大。スケールの大きさにまず驚かされる。その企図は 1844 年から 20 年余をかけて逐次刊行された『教父全集』へと結実する。さすがに 2000 巻とまではいかなかったようだが、それでもラテン教父シリーズ（略号 PL）221 巻、ギリシア教父シリーズ（略号 PG）162 巻という膨大な量である。『教父全集』とはいっても、古代から中世初期にかけての狭義の教父たちの著述のみを対象としたものではなく、もっと広い人物・時代範囲から、ジャンルも文学・歴史・法学等々、広く収集されており、その意味で当初の『キリスト教全書』の構想が生きている。

もとより問題がないわけではない。実物を見て驚かされることに、この種の資史料集につけられるべき文献解題もなければ、いかなるテキストによるものか、原本によるものか、写本によるものか説明がなく、当然のことながら異本間の異同に関する註もない。過去の教会史家等が編纂した刊本からそのまま復刻したものがほとんどなのだ。こうした欠点ゆえに、史料・文献批判の手続きをへた校訂版の刊行事業が早くも 1866 年にウィーン科学アカデミー編纂の『ラテン語教会著述家集成』（略号 CSEL）を嚆矢としてはじまっている。今世紀にはいって 1953 年から『キリスト教集成』（略号 CC）の編纂もはじまっている。これらの事業は今も継続されており、いつ終わるとも知れない。

つまりミーニュの事業を補完し、完成するには、なお想像を絶する歳月を要するのである。西洋中世史を専門とする私の関心範囲でいえば、例えばフランクのルードヴィヒ敬虔帝（†840）の国王文書集はいまだ刊行されておらず、ミーニュの『教父全集』になお依拠せねばならない。9 世紀末西欧聖界の巨人ランス大司教ヒンクマル（†882）の膨大な著述は、1645 年にシルモン（J. Sirmond）が編纂したものを『教父全集』では 2 巻本として復刻している。その中のかなりの部分は、今日校訂版が刊行されているが、なおミーニュに頼らねばならないものがある。例えば彼の書簡は 1939 年にその約半分が校訂版として編纂、刊行されたが、残る半分の校訂版は 60 年後の今なお未刊行なのだ。

ミーニュの方法は今日の水準からすると十分ではない。だが、それを差し引いて余りある恩恵を我々はうけ、またうけ続けよう。ミーニュに採録された作品とそれを手にする我々は、出会いの幸運をミーニュに負っている。

（Minoru OKACHI：文学部教授）

日本カトリック布教史と出版活動 幕末から昭和まで

山辺 美津香

1. はじめに

カトリック文庫プロジェクト委員会ではカトリックへの理解を深める活動の一環として、ここ数年、日本におけるカトリック関係書物の出版状況についての学習を続けてきた。ささやかではあるが、『カトリコス』や『南山大学図書館紀要』に「聖書」や「聖歌集」等、その年度ごとのテーマに沿って成果を発表してきた。1997年度から1998年度にかけてのテーマは、「カトリック要理書」（以下「要理書」という）である。しかし「要理書」の歴史を辿ることは、思いのほか困難であった。まずは関連の文献を持ち寄り基礎知識を共有しようと努めたが、「要理書」そのものについての解説資料はいくらか収集できても、その出版状況となると、適当な文献をほとんど何も見つけられなかった。暗中模索と逡巡を繰り返し、結局、専門的知識の不足や経験の不十分さを克服できないまま行き詰まり、挫折してしまった。

今後の活動方針を含め、プロジェクト委員会で改めて見直した結果、プロジェクトとしては一応打ち切ることとなった。そしてカトリック文庫委員会として名称新たに再出発するにあたり、1999年度の年間テーマは「布教」に決まった。この新しいテーマと取り組むことになったとはいえ、せっかく積み上げてきた一連の学習を頓挫させてしまった後ろめたさを消すことはできない。そんな思いでカトリック文庫に寄せられた膨大な資料を前にし、「要理書」に限らずに、カトリックの出版活動そのものと日本カトリック布教史との関連について振り返ってみることとした。

以下はカトリック文庫収集基準の一つである各時代、すなわち明治・大正・昭和初期のカトリックの布教活動を辿りながら、各時代の出版活動を概観しようと試みたものである。

2. 幕末から明治初期まで：日本再布教の時代

カトリック再布教は、明治末年にいたるまでパリ外国宣教会の独占布教にゆだねられていた。それは極東におけるポルトガル管区イエズス会の布教が、十七世紀末以来、フランス管区イエズス会に移行したことや、パリ外国宣教会士が東洋布教に経験を積み、成果をあげていたことにあるが、直接的には、日本教会再建の前提のもとに、ローマ教皇庁布教聖省が同会に命じ 1832（天保 3）年以來、朝鮮布教を開始させるとともに、琉球をもその管理下におくようブリュギエール（Barthelemy Bruguierre）司教に命じたことによる。しかし、朝鮮における激しい迫害で宣教師があいついで殉教したため、日本再布教計画はマカオにおける同会極東支部の会計部長リボア（Napoléon-François Libois）に託されていた。リボアは、フランス極東艦隊司令官のセシーユ（T. Cecille）とはかり、パリから派遣されて間もないフォルカード（Théodore-Augustin Forcade）を琉球に派遣して、強引に上陸させた。二百年余にわたる鎖国政策での厳しい禁圧のために壊滅した教会の再興をめざして、フォルカードが那覇に上陸したのは 1844（天保 15）年である。彼は 2 年間あまりの軟禁に近い生活を送り、1846（弘化 3）年にルテュルデュ（Pierre-Marrie Le Turdu）と交代したが、同年グレゴリウス十六世は、日本に再び代牧区を設ける教皇令を発した。フォルカードは 1847（弘化 4）年

マカオで日本代牧司教の任命を受け、香港で開国の期を待ったが、遂に日本入国の機を得ず、フランスに帰還して病没した。

日本の開国後、最初に日本教区長に任ぜられて入国したジラルル（Prudence-Séraphin-Barthélemy Girard）が、フランス総領事館付司祭兼通訳という肩書きで横浜・江戸にはいったのは、1859（安政 6）年であった。その後、琉球のフューレ（Louis-Théodore Furet）とプティジャン（Bernard-Thadée Petitjean）は、長崎に派遣されて大浦に天主堂を建立し、1865（慶応 1）年に、いわゆる信徒の発見となった。この旧キリシタン発見の報は全世界に歓喜をもって迎えられ、1866（慶応 2）年に、プティジャンは日本代牧司教に挙げられた。

1868（明治元）年 1 月に樹立された日本の新政府は、旧幕時代以上に厳しい態度を採り、キリスト教を弾圧する姿勢を崩さなかったため、浦上四番崩れ以来の復活キリシタン迫害は続いた。

プティジャンはフランス公使ロッシュ（Léon Roches）を動かし禁教令解除の運動をしたが、また潜伏キリシタン後裔の帰正のために教書の編纂にも努め、キリシタン版の再刻や新編などキリシタン伝統語を重んじた教書類（プティジャン版）を続々と秘密に出版し、その司牧に努めた。しかしこの出版活動は、一般的にはキリシタン邪宗門の再来という伝統的観念をもって迎えられるという逆効果を避けられなかった。

彼は 1871（明治 4）年末以降は長崎から横浜に居を移し、知識人への働きかけを意図した漢書系の文語体教書の出版を志し、『聖教理証』など若干の出版もみたが、1876（明治 9）年に石版印刷所が火災で類焼し、挫折した。数万人の司牧・帰正のために忙殺されていたプティジャンは、全日本に布教を展開するために補佐司教としてローケーニュ（Joseph Laucaigne）を選び、1874（明治 7）年叙階した。その後、日本布教は 1876（明治 9）年に長崎を中心とする南代牧区と、東京を中心とする北代牧区の南北二つの代牧区に分割され、それぞれの特殊性を重んずる方途で布教されることになり、みずからは長崎に司教座を置く南代牧区を担当した。北代牧区にはオズーフ（Pierre-Marie Osouf）が任命されてパリで叙階され、1877（明治 10）年に横浜に着座し、後東京にその司教座を定めた。

因みに禁教高札撤去された年の 1873（明治 6）年末の信徒数は約 1 万 5 千、そのうち 9 割が長崎の信者で、残りは主に函館、横浜、神戸などの居留地にいたようである。中部地方は、1875（明治 8）年頃から横浜、東京、鎌倉、小田原、伊豆半島、静岡、浜松、豊橋、岡崎、名古屋へと布教戦線が拡大され、関西は 1869（明治 2）年に大阪の川口と神戸の居留地に聖堂が建てられ、1879（明治 12）年から京都、津、松阪、亀山、大津、伏見、小浜、舞鶴、宮津、豊岡へと布教区域が伸びていった。信徒数は 10 年後の 1884（明治 17）年には 3 万余、ほぼ 2 倍に増加した。

明治初期カトリックはいわゆる「復活キリシタン」、すなわち長崎周辺の潜伏キリシタン



プティジャン司教

の後裔である農漁民を主とし、そのために少数の司祭らがとりあえずかれら信者の司牧と、誤伝されていた教理・祈祷などの訂正・再教育に全力を尽くさなければならなかった事情に加えて、浦上信徒の配流という迫害に直面し、その解放・帰還のため教会の主力は長崎に向けられていた。そのため、中央の新時代の指導層への働きかけをする余裕は少なかったと思われる。

3. 明治中期：発展の時代

1888（明治 21）年 3 月には南代牧区がさらに二分され、南代牧区と中央代牧区になった。南代牧区は九州及び琉球列島を包有し、1884（明治 17）年逝去したプティジャンに代わりクーザン（Jules-Alphonse Cousin）司教が統治した。中央代牧区は、ミドン（Félix-Nicolas-Joseph Midon）司教が大阪に司教座を置いて近畿、中国、四国を包含する関西布教を試みた。翌 1889（明治 22）年に発布された明治憲法により条件付きながら信教の自由が確保され、迫害は名実ともに終息したことになる。1891（明治 24）年 4 月には北代牧区が新たに二分され、東京を中心とする北代牧区と、東北・北海道地方を統治する函館代牧区となる。函館代牧区には、パリ外国宣教会士ベルリオズ（Alexandre Berlioz）が司教に叙階され赴任した。

1891（明治 24）年 6 月、教皇レオ十三世により日本において初めて教階制（Hierarchia）が実施されることとなった。すなわち諸教区名称を東京・長崎・大阪・函館の司教区と改称し、オズーフ司教を東京大司教に任じて首都司教とし、大阪、長崎、函館の三司教をその下に配して従属司教とした。

教階制とはいわゆるカトリックの盛んなカトリック教国に成立するものであるが、布教地においても成立し得る¹。しかし、カトリック教国の教会諸階級がローマの教区聖省の管下にあるのに対して、布教地の教会はローマ布教聖省の下に従属しており、当時の布教地には、通常、布教状態の発展の差異によって代牧区、知牧区、独立宣教区等の暫定的な形の教会組織しか存在していなかった。それらの最高司牧者はそれぞれ代牧、知牧、宣教区長と称し、ローマ教皇の代理として司牧するものであった。

教階制実施の 4 年後すなわち 1895（明治 28）年の統計によれば、日本の信徒数 50,302 名、司教 4 名、パリ外国宣教会士 88 名、マリア会士 27 名、邦人司祭 20 名となっている。

さて、明治中期の出版活動について振り返ってみよう。この頃カトリックがようやく中央の思想界、文化界に登場するようになり、パリ外国宣教会士リギョール（François-Alfred-Desire Ligneul）の活躍が注目を引く。1880（明治 13）年に渡来したリギョールは、中央知識層への布教開始のため活発な文筆活動を展開した。来日 5 年後の 1885（明治 18）年、カトリック総合誌『公教万報』を改組・改題して月刊『天主の番兵』の主幹となり、体系的に教理や教会史を解説するとともに欧米の新知識を伝え、あるいはカトリシズムの立場から時評を加えて知識層にカトリックの感化を及ぼした。著作活動の最盛期といわれる 1896（明治 29）年から 1902（明治 35）年においては毎年数点もしくはそれ以上の著述をものした。リ

¹ 田口芳五郎著「日本に於けるカトリック教の現勢」（1934 年）p.3

ギョールは、日本カトリック教会における最大の作家であると同時に、日本の知識層にカトリックを移植した最大の功労者として注目されるべきである。

またこの時代の出版として注目すべき事は、キリシタン時代の庶民的伝統から中世の古典及び近代欧米カトリック書に移行する過渡的現象として、明清時代の中国で出版された天主教古典への要求が起こり、漢書の輸入、訓詁、和訳が行われたことである。さらに 1895（明治 28）年オズーフ東京大司教により東京で教会会議が開催され、そこで祈祷文および教理書の全国的基準として東京大司教区用の翌年版の『公教会祈祷文』および『公教要理』を制定した。その後この『公教要理』は、一部を除いて 1924（大正 13）年の教会会議で改訂されるまで使用された。

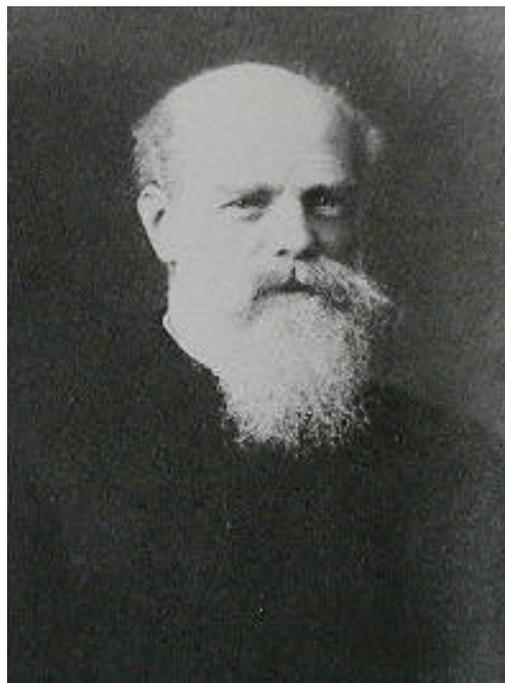
当時カトリック出版は東京の公友社、長崎、横浜、大阪の各天主堂等よりなされていたがその他には 1887（明治 20）年三島良忠・田村匡交・三上七十郎らが公教書籍出版仮局を創立し、カトリシズムに立つ思想運動を展開しようとした。ところがこの事業は、公友社等の教会の出版事業とは対立を免れず、結果、司教の許可なき出版は認めないというカトリック出版への教会の根本方針が示されるに至った。この一件は、プロテスタントの出版活動に比してカトリックのそれがその後もきわめて低調となった所以である。

4. 明治後期から昭和初期：独占布教時代から共同布教時代へ

1905（明治 38）年、明治政府は各教区を法人とすることを認可した。それまで教会財産は邦人司祭および信徒により構成される組合名義で登録されていたようである。このことにより、教会は民法上の法人としても公認されることになった。日本のカトリック再布教においてはパリ外国宣教会の独占布教に委ねられていたことは先に述べたが、この時期においても依然パリ外国宣教会の一手に託されたままであった。東京、大阪、長崎の各教区はすべて同会が受け持っていた。1904（明治 37）年に四国がフィリピンから渡来したドミニコ会に委ねられ、同時に大阪司教区から分離して知牧区となったことが、パリ外国宣教会士以外の宣教師が、日本の教会行政区画を受け持った最初である。これが先鞭となって、1912（大正元）年には新潟知牧区がドイツ人神言会士の受け持ちとなり、後に南山学園を創設することになるライネルス（Joseph Reiners）が初代教区長となった。1915（大正 4）年には札幌知牧区がドイツ聖エリザベト管区のフランシスコ会士に、1922（大正 11）年東京大司教区および新潟知牧区から分離併合した名古屋知牧区がドイツ人神言会士に、1923（大正 12）年には広島代牧区がドイツ管区イエズス会士にと次々にドイツ系宣教師に引き渡されていった。長崎司教区はその創設以来、パリ外国宣教会が受け持っていたが、最初の邦人司教早坂久之助に委任されることになったのは、1927（昭和 2）年のことである。そしてカナダのドミニコ修道会司祭等に函館司教区の受け持ちを譲ったのは 1931（昭和 6）年となっている。

日本のカトリック布教は、パリ外国宣教会の独占時代から多数の外国宣教会の共同布教時代を経て、さらに日本布教は日本人が行う自主的時代へと変遷したと考えることもできよう。

この頃、明治中期のリギョールと並んでもっとも盛んな著作活動をした人に、ドルワール・ド・レゼー（Lucien Drouart de Lézey）やラゲ（Emile Raguet）などがある。ドルワールはギリシャ正教からカトリックに改宗したケーベル（Raphael Koeber）らとともに 1909（明治 42）年創立した教学研鑽和仏協会より『真理の本源』他数十冊の著訳書を刊行している。教学研鑽和仏協会は信仰と科学は相反するという 19 世紀以来の思想に対し、宗教的科学的的小冊子を発行してこれを是正教化しようと設立された機関である。この協会はドルワールの復生病院への転出と第一次大戦の勃発により 1918（大正 7）年実質的に解消したが、明治から大正にかけてカトリック文化事業として大きな足跡を残した。



ドルワール師

大正期に入り、一般出版文化界の興隆に伴い教会の出版事業も発展してゆくが、あいかわらず、外国人宣教師の著訳書がほとんどすべてを占め、邦人はその訳者、協力者に過ぎなかった。しかし徐々にではあるが、浦川和三郎、岩下壮一、戸塚文卿、山中巖彦、松下佐吉などの出現により、邦人聖職者や信徒の手になる著述がみられるようになったのもこの時期の注目すべき事柄であろう。

また 1931（昭和 6）年には東京において全日本カトリック出版物統制会議が開催され、全国のカトリック者が一致協力してカトリック文書運動を促進しようと具体案を協議した。その結果、教会内の定期刊行物を総合し、小分立の弊をさけ、一般社会からも重視されるものを出版するという方針が確立された。

以上かなり端折る形であるが幕末から昭和初期にかけての日本カトリック布教史と出版活動を概観した。まだ未整理状態にある多くのカトリック文庫資料を整理する際、あるいは資料収集活動において個々の資料の背景をしっかりと把握できるように今後とも努めたいと思う。

（Mitsuka YAMABE：図書館事務課）

参考文献

- 海老沢有道著「維新変革期とキリスト教」東京，新生社，1968
- 海老沢有道・大内三郎共著「日本キリスト教史」東京，日本基督教団出版局，1970
- 池田敏雄著「人物中心の日本カトリック史」東京，サンパウロ，1998
- 田口芳五郎著「日本に於けるカトリック教の現勢」東京，東方書院，1934
- 上智大学編著「カトリック大辞典」東京，富山房，1942

資料紹介 『 LIBRO DE HORAS DE LOS MEDICIS 』 Madrid : Testimonio , 1994
 ----メディチ家の聖務日課書 (16世紀) ---- CL.No:CAT1/196.1/7

牧野 多完子

キリスト教会の本質的特徴の一つは、キリスト自身の生きた模範と意志とに従って行われる祈りであるが、その祈りは、内容や程度に於いて個人の任意に任されている個人的な祈りと、内容・形式・時間・言葉・声・動作に於いて正確に義務的に定められている公式の祈りの二つに大別することができる。聖務日課 (Officium Divinum) とは、教会公認の祈祷であり、一日のすべての時を聖化する時課の典礼として行われる。毎日一定の時刻に一定の形式により捧げられ、朝課 (Matutinu, Vigiliae)、讃課 (Laudes)、一時課 (Prima)、三時課 (Tertia)、六時課 (Sexta)、九時課 (Nona)、晩課 (Vesperae以前はLucernarium)、終課 (Completorium) の8つの定時課 (Horae) を指す。それぞれの時課に適した口誦、祈祷、詩篇、讃歌、聖書朗読、答誦から成る。その構成と内容は、時代・地域・会派などにより様々であり、繰り返し改訂が加えられた。この聖務日課を記載した祈祷書が聖務日課書 (Breviarium) である。

もともと聖務日課書は広汎で複雑なものであったが、すべてのキリスト者が参加できるようにと、階級・教養の程度・目標などを考慮し長短や順序を自由に決めたものが作られた。その基礎部分に詩篇や祈祷、教会の伝承による讃歌・聖書の抜粋を含む点は本来のものとかわらない。また、中世以後、身分の高い官職や富豪のためにつくられたものは立派な挿絵などで飾られ、現在も残る若干のものは宗教芸術の重要な宝となっている。

今回紹介する聖務日課書は、メディチ家において16世紀につくられたものである。



メディチ家といえばフィレンツェの大富豪一族であり、14～16世紀に及ぶ西欧の美術史・文明史の黄金時代、ルネサンスを牽引した名族である。1513年にメディチ家最初の教皇が選ばれレオ10世の名で即位した。この教皇は37歳の史上最年少の教皇として、また、サンピエトロ大聖堂の建設に力を注ぎそのため不幸にも宗教改革の要因をつくった、などとして知られるが、「平和」を維持した文化人であり、学者や芸術家を保護し、建築や美術の分野で大パトロン振りを発揮する。そのレオ10世が甥のロレンソ2世の結婚祝いに贈ったものがこの聖務日課書である。大きさは40×60mm、装飾挿絵、9色と2つの金の印刷、銀製装飾付きで金の小口の山羊皮製の装丁、同じく銀製の拡大鏡など、豪奢さと宮廷的洗練が特徴的な美しい本である。

本資料は、この聖務日課書の原本の虫食いの穴まで瓜二つ、完璧に近い最高の水準で微に

いり細を穿って複写復刻されたものであり、カトリック資料・文化的記録として、また芸術作品としても貴重な資料である。

(Takako MAKINO : 図書館事務課)

参考文献

- 「キリスト教大事典」改訂新版第5版・東京、教文館、1979
- 「日本キリスト教歴史大事典」東京、教文館、1988
- 「カトリック大辞典」東京、上智大学、1970
- 「新編西洋史辞典」改訂増補・東京、東京創元社、1995
- 「現代カトリック事典」東京、エンデルレ書店、1988
- 森田善之著「メディチ家」東京、講談社、1999

資料寄贈者(前号以降～1999.8)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈して頂きました。ここに名前を掲載させて頂き、改めて謝意を表したいと存じます。

[個人]

青山玄氏(南山大学名誉教授)、川原恵氏(社会福祉法人聖霊会理事長)、トマス・パーセル氏(聖アウグスチノ修道会慰めの聖母修道院)、山辺美津香氏(南山大学職員)

カトリック文庫新委員紹介

牧野多完子(システム係)

9ヶ月ぶりにこの委員会に復帰することとなりました。とはいえ、あまりに広く深い基督教の世界。少しずつでも謙虚な気持ちで学んでいきたいと思ひます。

小林志保(閲覧・参考係)

自分の中にはまだ基督教はおろか、宗教に関する引き出しがありません。これを機会に、新しい引き出しができれば、と思ひています。

笹山達成(図書館事務課)

4年ぶりにこの委員会にもどってきました。「光陰矢のごとし、学成り難し」を実感していますが、この文庫ともども知識を蓄えていければと思ひます。

問合せ先：南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

ホームページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/dyuna/midashi.htm>

E-mail: library@ic.nanzan-u.ac.jp TEL:052-832-3163 FAX:052-833-6986 担当者: 笹山

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第12号 1999.10.1発行 南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

編集委員: 笹山達成、伊藤敦子、小林志保